

新領域「グローバル関係学」 Newsletter 2020. Mar. (No.3)

† 領域代表よりご挨拶 †

千葉大学 グローバル関係融合研究センター センター長 酒井啓子

文部科学省科学研究費助成事業「新学術領域研究」『グローバル秩序の溶解と新しい危機を超えて：関係性中心の融合型人文社会科学の確立』（「グローバル関係学」）は、早くも4年を終え、残すところあと1年となりました。

世界各地での紛争、対立が、情報や思想、モノやカネ、人の移動のグローバル化などの影響を受け、複雑に絡み合う現代のグローバルな危機。この「新しいグローバルな危機」に対応するには、関係性に着目し、分野横断的な包括的視座をもって分析することが必要だと訴えて、本研究は始まりました。本研究開始時、「アラブの春」などの路上抗議運動やISの登場、難民の急増といった非国家主体による出来事が相次いだことが、背景にあります。

その後、トランプ米大統領の登場やヨーロッパでの排外主義の台頭、越境移動に対する管理・制限の強化や、米・中の貿易摩擦、北朝鮮を巡る安全保障問題など、国際政治における国家主体の役割が再び高まっているように見えます。しかし、その底流にある環境問題の深刻化や、社会的格差を巡る問題が重要性を失ったわけではないことは、近年の展開を見ても明らかでしょう。2019年から香港、南米、中東の各地で再び路上抗議運動が高まっていますし、#MeToo運動の高揚や地球温暖化に対する警告の高まりもまた、国家主体に対する挑戦とも言えます。さらに、新型コロナウイルス（COVID-19）が猛威を奮う現在の状況もまた、国家主体の枠を超えた「グローバルな危機」に世界が直面していることを如実に示しています。

発足からの2年間、本領域研究ではまず「グロー

バル関係学」に関わる理論や方法論の確立に焦点を絞って研究を進めてきました。2018年度に行われた中間評価においても、まずは学理の確立が求められる、との指摘を受けました。それらの評価を受け、領域全体で学理の確立とそれに基づいた個別事例研究の実施を推進してきました。

こうした研究成果は、各計画研究の研究会や領域HP上のオンライン・ペーパーなどで発信してきましたが、最終年度には全7巻の研究叢書として公刊する予定です。昨年1年間、出版社と頻繁に交渉、企画を重ねた結果、2020年度の「グローバル関係学シリーズ」の出版が決まりました。

シリーズの概要は近々発表される予定ですが、その内容は、「国家と制度」、「政治経済的地域統合」、「規範とシンボル」、「国家破綻と紛争」、「広域ネットワーク」といった計画研究のテーマに沿った巻に加えて、領域の中心的テーマとして計画研究横断プロジェクトの形で研究が進められてきた「移民・難民」の巻が予定されています。また、第1巻を「理論編」とし、基本となる学術的視座と方法論を論じた論考を所収します。

こうした研究成果に加えて、最終年度には大規模な国際会議を主催し、国内外の関連する研究者を集めて、「グローバル関係学」を世界に問う予定でした。しかし残念ながら、COVID-19の世界的感染拡大の勢いの収まらない現状では、困難かと思えます。しかし、英語での出版も含めて、海外への発信は期間終了後も地道に続けていきたいと考えています。引き続き、皆さまのご理解とご協力を、よろしく願いいたします。

2018～9年度の主要な活動

本領域研究では、「グローバル関係学」という概念のもとに、それぞれの計画研究班が具体的な研究テーマを設定、共同研究を実施しています。

「国家と制度」を分析対象とする計画研究 A01（代表：松永泰行）では、国家と制度に関わる制度的・社会的「境界」面に着目しながら、通時的な関係性の思いがけない錯綜により起きるグローバル関係学的な危機の実証的分析、という共通の目標を掲げ、研究代表者と分担者がそれぞれの研究課題に関わる危機的事象を分析的に掘り下げました。

「政治経済的地域統合」をテーマとする計画研究 A02（代表：石戸光）では、地域統合の突発的、階層縦断的な分断事由をカタストロフィ理論により類型化し、①権利主張の高まりによる場合、②資源豊富国が他国から権利主張を受けた場合、③資源非保有国が他国から権利主張を受けた場合、④関係性を反転させる場合など、地域統合分断の仮説を提示し、個々の研究に反映させています。

計画研究 B01（代表：酒井啓子）では、「記憶・表象・権威」をキーワードに、規範とアイデンティティの時間的な継承とグローバルな広がり进行分析しています。そこでは歴史的記憶の地理的、時系列的な共有や、映像、音楽、服装など非言語的な表象に現れる文化・政治・歴史的意味の地域間比較を行い、社会運動や装い、音楽を取り上げました。

「国家破綻と紛争」を扱う計画研究 B02（代表：末近浩太）では、破綻国家における国家観のズレをテーマとして現地での世論調査を実施、比較研究を行っています。一定の共通性を持つ質問票を使用してイラク、シリア、ボスニア、ソマリア、リビアに関する世論調査を実施し、一般市民の国家観のズレ／ブレに関する知見を共有しました。

「広域ネットワーク」を扱う計画研究 B03（代表：五十嵐誠一）では、国家間関係ではカバーできない、地球規模で共有される諸問題と現象が増加している現状を踏まえ、それらの動的展開過程を分野横断的に研究しています。グローバルな問

題解決アプローチとグローバル・コモンズの創生の可能性を探るため研究会を実施してきました。

それらの成果は、以下の形で国際会議や出版物の形で積極的に発信されています。

<「グローバル関係学」の国内外への発信>

2018～19年度においては、これまでに領域内で確立したグローバル関係学の概念に基づき、各分担研究者の専門分野に沿った研究成果を国内外に発信することに重点が置かれました。ここでは領域関係者が積極的にその成果を発信した国際学会、ワークショップなどを紹介します。

(i) 国際学会

2018年は大きな国際学会が連続して開催され、領域の分担者がその共同研究の成果を発表しました。7月の「世界政治学会」大会（オーストラリア）において、領域代表の酒井は「グローバル関係学」の基本概念を報告し、コメンテーターや出席者から高く評価を受けました。同時に、分担者の松尾、公募研究者の岩下、および村上勇介氏（京都大学東南アジア地域研究研究所）とともに、パネル“*A New Approach to Analyzing Contemporary Global Crises*”を主催しました。また計画研究 B01 が実施する紛争国での世論調査結果をパネル“*Analyzing Multi-layered Perceptions of a 'State' in War-torn Societies*”で末近、久保、山尾が報告したほか、パネル“*Political Change and Migration from the Middle East: Crossing Borders and Political Marginalization*”で A01 の岩坂が報告しました。

同じ7月にスペインで実施された世界中東学会では、計画研究 B02 から末近、山尾、佐藤（麻）（協力者）が、A01 および B01 の Darwish, Abdin, 南部（協力者）が、パネル報告を行うとともに、B01 から後藤が研究報告を行いました。

(ii) 計画研究ごとのワークショップなど

一方で、各計画研究の研究テーマに沿ったワークショップやシンポジウムが、国内外で実施され

ました。計画研究 A01 はテヘラン大学（イラン）、ヤシャル大学（トルコ）との共同での会議を、セルビアからの講師を招聘しての講演会を、国際ワークショップの形で実施しました。またフンボルト大学移民統合研究所（独）、アガー・ハーン大学ムスリム文明研究所（英）と国際共同研究活動を実施しました。

計画研究 A02 では、宇都宮大学にて国際シンポジウムを開催し、ジャコモ・ルキアーニ氏（ジュネーブ国際開発高等研究所）を招聘して資源問題に関する研究報告を行ったほか、地域統合を巡るワークショップや研究会を年に数回、開催しました。

計画研究 B01 は、2018 年には「1968 年」から半世紀を記念して、クラウディア・デリクス氏（ベルリン・フンボルト大学）と小熊英二氏（慶應義塾大学）を招聘して国際シンポジウムを、19 年には音楽を巡るワークショップを行ったほか、国交樹立 80 年を記念してイラク・日本関係についてのワークショップを、日本およびイラクで実施しました。

計画研究 B02 では若手育成に力点を置き、2 年間で 14 回の若手研究発表会を、また国内外の講師を招聘してのシリーズ講演会を 9 回、立命館大学で実施しました。また同計画研究が共同研究の軸とする世論調査分析についての手法を巡る研究会を、早稲田大学や亜細亜大学などで開催しました。

計画研究 B03 は、イラクのジェンダー研究専門のザフラ・アリー氏（米）を招いたセミナーを、移民労働問題研究者、イルダヤ・ラジャン氏（インド）を招いた国際ワークショップを、いずれも一橋大学で実施した他、同計画研究の文理融合アプローチを活かして、熱帯農業の観点からアジアにおける農村の持続性に関する国際シンポを実施しました。

(iii) 出版物：オンライン・ペーパーなど

研究成果は、会議での口頭報告のみならず、オンライン論文として次々に発表しています。2018 年から開設したウェブ上でのオンライン・ワーキング・ペーパーでは、第 1 号において領域代表の酒井が「「グローバル関係学」試論」を発表し、理

論的視座の構築と領域内での概念共有を図りました。ついで A01 代表の松永、A02 代表の石戸が、いずれも「グローバル関係学」の学理の核となる議論をワーキング・ペーパー第 2、3 号として発表しました。これらは、それぞれの計画研究がその後の各論の積み上げを行っていく上で、土台となる視座を提供するものとなっています。第 4～6 号は、B02 分担者の山尾が自らの世論調査、テキスト分析の結果を報告しました。

さらに、オンライン・ペーパーには「調査レポート」「講演録」の種別を設け、前者には B02 の世論調査の分析結果が計 3 号にわたり発表されました。後者には、2018 年の京都大学で実施された若手研究者報告会における立本成文氏（京都大学名誉教授）の基調講演が、掲載されました。

各計画研究の分担者は、それぞれの研究成果を個別の論文、著作の形で発表していますが、A02 では B03 と共同で、キン・ニュン・ミャンマー元首相の回顧録の翻訳を出版しました。また B03 では、2017 年度に開催した国際シンポジウム「メコン・コモンズからメコン共同体へ」の成果を土台として、タイ（国立遺伝子生命工学研究センター、マヒドン大学、チェンマイ大学、メコン機構）およびベトナム（南部社会科学院）の研究者を執筆者に加えて、英文書籍として Routledge から刊行する準備を進めています。同じく Routledge からは、酒井、山尾が B01、2 の共同で実施してきたイラク研究の成果として、編書が出版される予定です。

(iv) 社会発信のための講演会

上記以外に、現在進行中の「グローバルな危機」を取り上げて、一般向けの講演会やパネルディスカッションを開催しています。シリア内戦やシリア難民問題、パレスチナ問題に対する関心は市民の間でも高く、映画上映や現地活動家の招聘と解説、現地情勢の緊急報告会などを頻繁に開催しました。またイランとサウジアラビア、イランとアメリカの間の緊張の高まりや中東各地での路上抗議運動の再発を受けて、現状分析を行う緊急ワークショップを開催しました。

<国際会議のセルビア、タイでの開催>

本領域では、「グローバルな危機」のテーマを選んで国際会議を毎年海外で実施することとしています。2018年度は、セルビア共和国の社会科学研究所との共催でベオグラードにて、紛争をテーマとした国際会議 **Relational Studies on Global Conflicts: Toward a New Approach to Contemporary Crises** を実施しました（12月21～22日）。本国際会議では、多様なアクターが重層的に関与する地域紛争と、そうした紛争を経験した国・地域における紛争後の秩序の再構築を取り上げ、2日間で合計8つのパネル、全29の研究報告が行われました。会議には、日本から15名が、日本以外から約30名（セルビア在住の大学院生、外交官や国際機関の職員等に加え、シンガポール、セルビア、英国、ドイツ、イタリア、ウクライナ、スロヴェニア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、モンテネグロからの参加者）が参加し、各パネルで活発な議論が交わされました。

2019年度は、12月2～3日、マヒドン大学インターナショナルカレッジとの共催で、「資源と移動」をテーマとした国際会議 **Resources and Human Mobility** が開催されました。本会議は、グローバル関係学の海外研究拠点の1つとしての千葉大学バンコクキャンパス（マヒドン大学インターナショナルカレッジ内）と同大学との連携により実現した国際研究活動の1つです。8つのパネルが設けられ、日本からの参加者は18名、海外からの参加者は約25名（タイ、フィリピン、オーストラリア、オーストリア、ドイツなど）と、第一線の研究者が集結して活発な研究報告および討論が行われました。会議後、フィリピンをベースにした国際ジャーナル **Asian and Pacific Migration Journal** 第28巻第4号に、その概要報告が掲載されました。

<https://journals.sagepub.com/eprint/XWA2IHURWP26FDBEZEFD/full>

<若手研究者報告会の開催>

本新領域事業が力を入れていることのひとつに、若手研究者の育成があります。2018年度の第2回

若手研究者報告会は京都大学にて開催され、公募研究者を含め18件の報告を2日間にわたり行いました。そのなかには、SNSなどのコミュニケーション技術の革新が国語の使用や難民の社会的ネットワークに与える影響、イスラーム主義のグローバルな拡大による国家の宗教管理体制の変容、位置情報付きの言語別ツイートのビッグデータにもとづく各民族のネットワークの抽出など、グローバルな構造変化や技術革新をふまえた意欲的な研究の報告が続きました。また、大国間のパワーランジションや大国の世界戦略についても、20世紀型の大国間関係と21世紀とで何が違うのか、といった切り口での議論が持たれました。さらに「ナショナリズム」、「多文化主義」、「アイデンティティ」といったキーワードの元に、事例研究の報告および討論が闊達になされました。

2019年度の第3回報告会は、千葉大学柏の葉キャンパスで実施され、13件の報告が行われました。内容は医療人類学から人権をめぐる国際レジームに関する議論、さらには農業と地域社会の関係を論じたものなど、多岐にわたる議論が展開されました。

<公募研究の採択>

2018年度には第2期の公募研究の募集が行われ、2019年度から9名の公募研究者が研究を開始しています。そのうち、水野貴之（国立情報学研究所）、張雲（新潟大学）は前回から引き続きの採択となりました。その他、池田昭光（東京外国語大学）、東聖子（近畿大学）が宗派コミュニティに関する研究を、岡野英之（立命館大学）、松本尚之（横浜国立大学）が移民の越境的ネットワーク研究を専門とするほか、玉置敦彦（都留文科大学）、高光佳絵（千葉大学）が国際関係論の観点から、清野薫子（東京医科歯科大学）は保健医療の観点から、グローバルネットワークの分析を行っています。彼らの領域全体への貢献が、待ち遠しいところです。

（以上、領域内研究者については敬称略）

グローバル関係学とはなにか

領域代表：酒井啓子

21世紀に入り、9.11同時テロ、アフガニスタン戦争、シリア内戦、IS（「イスラーム国」）の台頭など、世界各地で紛争、動乱が多発している。その結果としてヨーロッパへの難民流入といった大規模な人の移動が発生し、反動として、トランプ政権の誕生を代表として欧米先進国での排外主義が進行している。2020年初頭から世界で爆発的な流行を見せた新型コロナウイルス感染症の蔓延とそれを巡る国際政治の対応は、まさに「グローバルな危機」を体現したものに他ならない。

こうした現代の「グローバルな危機」は、リアルタイムの波及性や連鎖性、唐突さといった点で、従来の危機と異なる新しい側面を持つ。情報やモノ、人がグローバルかつ縦横無尽に移動する現代においては、ミクロ（地域共同体レベル）からマクロ（グローバルなレベル）まで多種多様な主体が縦横無尽に関係を有するが、この変幻自在の関係性が複雑に交錯することによって、予測不能な出来事が生まれている。

こうした予測不能な「危機」は、それが世界を震撼とさせグローバルな関心を得るまで、その展開を支える背景や意味、展開過程の多くは、容易には私たちの目には「見えない」。そこには、発生場所の遠さからくる情報の少なさや、調査の困難さという技術的な「見えなさ」がある。

一方で、「グローバルな危機」に関係するさまざまな主体の多くが、非国家主体であるか、実際のところは主体ですらない「流れ」のようなものであるがゆえの、「見えなさ」もある。私たちは「主語のない出来事はない」とみなしがちであり、「主体」がわからない、主語のない出来事は、「見えない」ことにしがちだ。「アラブの春」での路上抗議運動は、運動の指揮系統も参加要件もない開かれたもので、確固たる主体のもとで展開されたものではなかったが、それを「見る」者は「民主化運動」や「反政府組織」などのわかりやすい「主語」を指定してしまい、文化的潮流や社会的鬱屈を見落としてしまう。

さらに、非欧米地域のさまざまな事象について、西欧起源の学問がそれを長らく「見ない」対象としてきた、という問題がある。主として欧米の主体中心の学問領域においては、非欧米諸国の出来事は分析の客体や実験の材料とみなされてきた。トランプ米大統領という主語が「テロ」という客体を「やっつける」という図式がわかりやすいのは、客体がよく「見えな」くても、その主語が私たちによく「見える」国家主体だからである。

だが、主体や客体をより明確に「見る」ことだけが求められているのではない。「グローバルな危機」の背景にある「主語のない出来事」を見るためには、「流れ」の過程、「流れ」を作り上げている関係性を分析対象とする必要がある。さまざまな関係性が双方向、複方向的に交錯し連鎖するなかで、出来事が起きる。そうした関係性の網のなかに、澱や瘤のように「主体」が浮き彫りになる。

本新領域研究が提唱する「グローバル関係学」（グローバルな危機を把握、分析するための関係学的視座に立つ学問）の目的は、私たちが「見えなかった／見なかった出来事を見る」ために、主体中心主義から関係中心主義に、その視座の重点をシフトさせることである。そして、関係中心的視座から「グローバルな危機」につらなる世界のさまざまな出来事を分析する新たな学術領域を形成することである。そこでは、地域研究の持つ、欧米中心、主体中心の近代知を相対化する役割が活かされる。

関係性に着目した議論は、これまでも社会学や哲学分野において、繰り返されてきた。これに対して本領域が提示する「グローバル関係学」の特徴は、それが概念論的展開というよりは、主に非欧米世界を対象とする地域研究の実証から生まれた点にある。非欧米世界を客体としてしか見ない視点を廃し、これらの地域で起きていることをよりグローバルな文脈のなかで「見る」必要性は、非欧米世界の地域研究者の間で痛感されてきた。欧米型の主体中心主義を関係中心主義へとシフトさせることが必要であるとの発想は、そうした背景から生まれたのである。

まとめれば、「グローバル関係学」とは、狭い範囲の地域共同体から超領域的グローバルなネットワークまで、非欧米世界を含めた世界を総体として把握する視座を確立し、主体中心的視座で「見えなかった／見なかった」ものを、関係中心的視座から「見える」ようにすることを目的とするといえよう。

会議等開催記録

2018 年度会議等開催記録

月	日	会議名	会場	主催
4月	3日	若手研究者による研究発表会	東京外国語大学本郷サテライト	A01、B01
4月	12-13日	若手研究者による研究発表会	千葉大学西千葉キャンパス	B01
4月	14日	シンポジウム「シリア 殺戮と破壊を生きる—絶望の中に紡ぐ希望—」	東京大学駒場キャンパス	B01
4月	23日	ガザ情勢緊急報告会（講師 Iyas Salim Abu-Hajjar）	立命館大学衣笠キャンパス	B02
5月	10日	第1回若手育成のための研究発表会	立命館大学衣笠キャンパス	B02
5月	17日	第2回若手育成のための研究発表会	立命館大学衣笠キャンパス	B02
5月	19日	研究会「世論調査データの分析手法とその適用」	早稲田大学早稲田キャンパス	B02、横断
5月	24日	第3回若手育成のための研究発表会	立命館大学衣笠キャンパス	B02
5月	30日	緊急シンポジウム「緊張高まる中東：イラン、イラク、レバノン、イスラエルの今を分析する」	明治大学駿河台キャンパス	総括班
5月	31日	第4回若手育成のための研究発表会	立命館大学衣笠キャンパス	B02
6月	2日	研究会「インドネシア世論調査報告会」	亜細亜大学	A01
6月	4日	特別セミナー「世界各地で進行している政治経済的地域統合の現状と課題を論じる」	名古屋経済大学	A02
6月	21日	講演会「The Insecurity Trap: Violence, Order and Contemporary State-Building」	立命館大学衣笠キャンパス	B02
6月	28日	第5回若手育成のための研究発表会	立命館大学衣笠キャンパス	B02
6月	30日	研究会「イラク情勢にかかわる研究会」	東京外国語大学本郷サテライト	B02
7月	7日	研究会「リビア・イエメン情勢にかかわる研究会」	東京外国語大学本郷サテライト	B02
7月	8日	シンポジウム「記憶と記録からみる女性たちと30年——装いにうつるイスラームとジェンダー」	東京大学情報学環・福武ホール	B01
7月	12日	Amitav Acharya 教授講演会「Towards a Global IR Origins, Evolution and Transformation of a Discipline」	立命館大学衣笠キャンパス	B02
7月	16-20日	第5回世界中東学会大会	セビーリャ大学（スペイン）	国際活動
7月	17日	第3回グローバル・コモンズ研究会	千葉大学	B03
7月	21-25日	第25回世界政治学会大会	ブリスベーンコンベンションセンター（オーストラリア）	国際活動
9月	21日	レクチャー「ポストコロニアル世界のイスラームと女性・ジェンダー」	一橋大学東キャンパス	B03
9月	21日	シンポジウム「Responding to Refugee Crisis and Disaster—New Approaches in the Humanities and Social Sciences」	筑波大学	公募研究
9月	28日	研究会「政治経済的地域統合～地域横断的な学理の確立に向けて～」	千葉大学西千葉キャンパス	A02
9月	29日～10月6日	写真展×レクチャー「マイノリティとして生きる ムスリムとアイデンティティ」	東京大学東洋文化研究所	B01
11月	1日	第6回若手育成のための研究発表会	立命館大学衣笠キャンパス	B02
11月	15日	研究会「現代トルコにグローバル関係学する」	東京大学東洋文化研究所	A01、B01
11月	15日	講演会「Damascus in the Eye of the Storm: How Human Rights Lost the Agenda in Syria」	立命館大学衣笠キャンパス	B02
11月	17-18日	第10回 日本・イラク学術合同会議 「日本とイラクの教育制度：比較の視座から」	早稲田大学	総括班

11月	22日	国際ワークショップ「イラクは、今～イラク人学者の見た戦争、IS、政治と社会～」	千葉大学西千葉キャンパス	総括班
11月	22日	第7回若手育成のための研究発表会	立命館大学衣笠キャンパス	B02
11月	29日	第8回若手育成のための研究発表会	立命館大学衣笠キャンパス	B02
12月	8-9日	第2回 若手研究者報告会	京都大学稲盛財団記念館	総括班
12月	15日	国際シンポジウム「1968年再考 — グローバル関係学からのアプローチ」	東京大学福武ホール	B01、 B02
12月	18日	国際ワークショップ「トランスナショナル運動としての「ムサーワー(Musawah)-ムスリム家族内の平等関係の構築に向けた取り組み-」	東京大学東洋文化研究所	B01
2019年 1月	8,15,22日	第4～6回グローバル・コモンズ研究会	千葉大学西千葉キャンパス	B03
1月	12日	シンポジウム「「アラブの心臓」に何が起こったのか 現代中東の実像を捉える」	立命館大学衣笠キャンパス	B02
1月	18日	第3回総括班会議	東京外国語大学本郷サテライト	総括班
1月	18日	方法論研究会「グローバル関係を観測可能なビッグデータとその分析事例の紹介」	東京外国語大学本郷サテライト	横断
2月	6日	国際シンポジウム「新たな政治経済地図 エネルギー資源、移民、政治経済的地域統合」	宇都宮大学峰キャンパス	A02
2月	9日	ワークショップ「装いと規範」	京都大学東南アジア地域研究研究所	B01
2月	10日	特別ワークショップ「イラン革命から40年一何が変わり、何が実現したか」	東京グリーンパレス	A01
2月	19日	国際ワークショップ"Islam with Adjectives and Islami as Adjectives"	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所	A01、 B01
2月	19日	国際ワークショップ"Turkish-Japanese Joint Research Workshop on Migration"	トルコ・ヤシアル大学 (YAŞAR University, Izmir, Turkey)	A01
2月	20日	「グローバル関係学」2018年度第一回全体会議	東京外国語大学本郷サテライト	総括班
2月	22日	ワークショップ「アジア域内の南-南型人口移動の現状と課題—インドの経験を中心に」	一橋大学東キャンパス	B03
3月	16日	ワークショップ「アジアの農村の持続性……都市と地方の共存共栄は可能か」	千葉大学柏の葉キャンパス	B03

2019年度会議等開催記録

年月	日	会議名	会場	主催
4月	15日	MEIS Lecture Series 1 「中東政治の「理解」に向けて：その方法を再考する」	立命館大学衣笠キャンパス	B02
4月	20日	第1回総括班会議	東京外国語大学本郷サテライト	総括班
4月	22日	MEIS Lecture Series 2 「石油が引き起こす呪い」	立命館大学衣笠キャンパス	B02
5月	10日	シンポジウム「アジアを知る」短編映画『シリア三部作』から考えるシリアの今	東京大学東洋文化研究所	B01
5月	18日	講演会 玉本英子氏「写真と映像で伝えるイラクのヤズディ教徒」 ISによる迫害と現状	立命館大学衣笠キャンパス	B02
5月	23日	第1回若手育成のための研究発表会	立命館大学衣笠キャンパス	B02
6月	8-10日	国際シンポジウム"Crossing Boundaries: Migration, Mediation, Morality"	東京大学伊藤国際ホール、東洋文化研究所	B01
6月	11日	セミナー「新兵募集における軍服とロマンチズム：戦間期中東の英国とベドウィン」	東京大学東洋文化研究所	B01
6月	13日	第2回若手育成のための研究発表会	明治大学駿河台キャンパス	B02

6月	27日	国際ワークショップ "Refugees and Internally Displaced Persons in Post-war Serbia"	慶應義塾大学三田キャンパス	A01
6月	27日	第3回若手育成のための研究発表会	立命館大学衣笠キャンパス	B02
7月	3、10、17、27日	第7～10回「グローバル・コモンズ研究会」	千葉大学西千葉キャンパス	B03
9月	22-23日	「グローバル関係学叢書シリーズ」第2巻 中間報告会	東京外国語大学本郷サテライト	A01
9月	24-28日	第11回日本・イラク学術合同会議「日本・イラク間における80年間の交流史を総括する：地域研究を通じた学術交流」	イラク・バグダード大学	B01
9月	27日	研究会「多元化する地域統合」	千葉大学西千葉キャンパス	A02
10月	11日	「グローバル関係学叢書シリーズ」第1巻 中間報告会	早稲田大学早稲田キャンパス	総括班
10月	12日	計画研究 A02 (政治経済的地域) の国内研究会	龍谷大学深草学舎	A02
10月	14日	CMEIS Lecture Series 1 「中東における石油と国際政治」	立命館大学衣笠キャンパス	B02
10月	17日	シンポジウム「アジアを知る 『真昼の星』 上映&ウサーマ・ムハンマド監督講演」	東京外国語大学本郷サテライト	A02
10月	17日	CMEIS Lecture Series 2 "Islam in France and Europe"	立命館大学衣笠キャンパス	B02
10月	31日	第4回若手育成のための研究発表会	立命館大学衣笠キャンパス	B02
11月	10日	ワークショップ「音楽とグローバル関係学」	東京大学東洋文化研究所	B01,B02
12月	2-3日	国際会議 "International Conference on Resources and Human Mobility"	タイ・マヒドン大学 インターナショナルカレッジ	総括・国際支援班
12月	5日	第5回若手育成のための研究発表会	立命館大学衣笠キャンパス	B02
12月	7日	講演会 北京大学国家発展研究院院長 (元世界銀行・上級副総裁)	千葉大学西千葉キャンパス	A02
12月	12日	第6回若手育成のための研究発表会	立命館大学衣笠キャンパス	B02
12月	15日	緊急ワークショップ「『アラブの春』再来? : スーダン、レバノン、そしてイラク」	明治大学リバティータワー	B01,B03
12月	20-22日	第3回 若手研究者報告会	千葉大学柏の葉キャンパス	総括班
2020年1月	11日	シンポジウム「現代イスラーム世界を眺望する：研究の最前線」	立命館大学衣笠キャンパス	B02
1月	13日	シンポジウム「ボリビアで今何が起きているか：エボ・モラレス政権と再選挙を考える」	東京大学駒場キャンパス	B01
1月	25日	講演会「紛争を生きる：ジャーナリストが見た戦時下の中東」	京都経済センター大会議室	B02
2月	10日	ワークショップ「装いと規範」	京都大学東南アジア地域研究研究所	B01
2月	13日	ワークショップ「ラップ・ジェンダー・社会運動」	東京大学東洋文化研究所	B01
2月	20日	シンポジウム「アジアを知る」映画「女らしさ Mohtarama」	東京大学山上会館	B01
3月	18日	第2回総括班会議	東京外国語大学本郷サテライト	総括班

2020年3月28日発行
編集責任発行者 酒井啓子
発行所 千葉大学グローバル関係融合研究センター
<http://www.chiba-u.ac.jp/crsgc/>
263-8522 千葉市稲毛区弥生町 1-33 千葉大学
Tel. 043-290-2334 e-mail: gblcrss@chiba-u.jp
インターネットホームページ : <http://www.shd.chiba-u.jp/gblcrss/index.html>